

雪合戦のワンバドゥン



地元女子中学生も大活躍。

「雪合戦」活動の背景

雪国の住民は、長い間、冬は暗く、非活動的、耐えるというイメージに支配されていた。私たちの町も同様にヒトモモノモココロも雪に閉ざされていた。夏、多数の観光客で賑わった北海道を代表する観光地、昭和新山も冬は人影もまばらな状況になる。年間約二百万人の来遊者が訪れるが、厳冬期の十二月から三月は皆無に等しい。

このことは、地域経済を停滞化させ、安定した雇用の確保を難しくしている。何とか、冬も観光客に来てもらい、地域経済を活性化させることによって通年雇用を確保できないか。これが当町の悲願であり、大きな課題となっていた。また、景観を見るだけの通過型から、体験を通じた滞在型観光への質的転換も求められていた。

近年、各地で先駆的に展開される利雪、親雪の試みが、私たちの挑戦の動機づけとなり、行動を誘発させた。町民が地域の現状と課題を認識し、共通理解を深め、知恵と汗を結集すれば、冬を楽しむ(活動的)、快適に過ごすための方策、地域づくりの新しい視野が広がってくるのではないか。町民の中に内発的気運が高まってきていた。

雪遊びの楽しさをイベントに
冬期の地域活性化の手法として、まず中核となるイベントを創ることとした。

一九八七年八月に若者グループ(商業・観光・農業・公務員)によるアイデア検討会が結成され、スキーマラソン、仮装ソリ大会、大雪像づくり、犬ぞり大会等、いろんなアイデアが出されたが、そのいずれもが北海道内で既に実施されていて決定打とはなら

なかった。

議論が空転する日が続いたが奇をてらうのではなく、身近なところにある資源を見直すなかから「雪合戦」のアイデアが浮上した。雪合戦は雪国の古くからの遊びであり、陳腐で新鮮味がないとの意見もあったがさらに話し合いを深める中で、旧正月頃に北海道を訪れる雪のない東南アジアからの旅行者のことが話題となった。彼らは千歳空港に到着するとただちに観光バスに乗り、最初の訪問地昭和新山に来る。そこで初めて見る雪に感激し、その感触を確かめる。その次にする行動。それは雪をかけあい、雪を丸めて投げることである。雪に対する先入観のない人びとがする行動。その様子は嬉々としていて、とても楽しそうである。

私たち雪国に住む者は日常的に雪を見ているため、雪が降ることで一変する風景への感動や神秘さ、雪遊びの楽しさを忘れてしまったのだと気がついた。資源としての雪の価値を見直し、昔遊んだ雪合戦の楽しさを現代風に再生させようということになった。

一九八七年十二月アイデア検討会は「雪合戦」をイベントとして開発することを決定した。

第一回昭和新山国際雪フェスティバル

一九八八年七月、「昭和新山国際雪フェスティバル実行委員会」(第一〇回を機に「昭和新山国際雪合戦実行委員会」と名称変更)と呼ばれるこの実行委員会は、多種、多様の職業の方々約四〇〇人がボランティアとして企画、運営に携わっている。お年寄りも昭和新山は寒いので会場には行けないけれど、豚汁の野菜切りはできると公民館の調理室で働いてく



聖火台に点火。国際大会の幕開けです。



国際大会ならではのフィンランドからの参加チーム。

れる。商工会青年部は、コートづくりに汗を流している。普段はあまり交流の機会が少ない各地区、異業種の町民が雪合戦の共同作業を通じて交流を深めている。

一九八九年二月第一回昭和新山国際雪フェスティバルが開催され、参加チームは七〇チーム、来場者は七、〇〇〇人が集まった。雪合戦、全国、海外へ！

全国各地で雪合戦大会が開催されるようになり、これまで北海道内はもとより青森県や大分県にも町民スタッフが講師として派遣され、人前で話したことのない町民が先生になり講習を行うことで人づくりにもなっている。

また、これまでヘルメットは実行委員会が手作りで用意してきたが、全国的、海外への普及状況を踏まえ、スポーツメーカーの協力を得てスポーツ用具として商品化した。これは、雪合戦の普及に伴い用具の量産が求められるようになってきたことと、用具の強度・安全性を高めるための専門的研究・実験が必要となったためである。雪球製造器も軽量化・機能性のアップを助言し、改良を進めている。また、オーストラリア、フィンランド、ノルウェーにも要請を受け派遣された。

第六回大会には韓国から視察団が来場し、一九九六年はロシア・ハバロフスク地方行政府に雪合戦情報が提供された。英語版のルールビデオ・ルールブックも製作している。第七回大会からはフィンランドチームが、第九回にはノルウェーチームも海外から参加、フィンランド・ノルウェーからも雪合戦連盟結成の準備がなされているなど、「雪合戦」の、まさしく国際化が進んでいる。

私たちの目標は「雪合戦のウインブルドン」。雪は自然がくれた北国へのプレゼントである。世界的にみても雪の降る地域は決して多くはない。やっかいものの雪を活用して冬の生活を楽しく豊かにしようとするのが、「スポーツ・雪合戦」のコンセプトであり、いまその輪は全国そして海外へ広がりにつつある。生活の質を問う国民意識の変化に伴い、ライフスタイル、レジャータイプも変容してきている。雪合戦は雪という条件が整えば、いつでもどこでも誰でもができるスポーツである。冬のニースポーツ・雪合戦の開発・普及を通じ、日本国内各地との新しい交流が生まれた。また、フィンランドなどの国際的な交流もさらに進んだ。ただ、昭和新山は「スポーツ・雪合戦」発祥の地、そのメッカとしていつまでも憧れの的でありたい。そして昭和新山国際雪合戦に出席出来ることが大きな名誉であり、そこで展開される試合は最高峰のものであると位置づけられるように育てていくつもりである。まさに私たちの目標は「雪合戦のウインブルドン」である。

また、現在は、当初の目的とした冬期間の昭和新山への観光客の誘致でも、各旅行会社より修学旅行でのスキーに変わって雪合戦体験ができないかという問合せが多く、観光協会を窓口として実施を検討しているところである。

私たちの夢。それは平和の祭典、オリンピックの舞台で世界の仲間が友情の雪球を投げ合うことである。その日を夢見て北国の小さな町の大きな挑戦は続く。

壮瞥町 昭和新山国際雪合戦実行委員会



世界初の雪球製造器で、戦闘の準備に余念がない。



シェルターに身をはり付け、敵の球からのがれる新技。